

令和5年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属小学校	校長名	佐々木 昭弘
幼児・児童・生徒数（R6.3.1現在）	747名	学級数	24学級
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ○人間としての自覚を深めていく子ども ○文化を継承し創造し開発する子ども ○国民としての自覚をもつ子ども ○健康で活動力のある子ども 		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> (1) 本校の特色である小学校における「教科担任制」を充実させ、校内研究のテーマを中心に、教科教育の実践的研究を深めていく。その中で、各教科の本質を追究しながらカリキュラムの見直しを図っていく。また、総合活動や学校行事など、教科外の活動についてもその価値と位置づけについて、社会情勢も見据えながら追究し、学校教育目標の実現を目指す。 (2) 現職教育の拠点校として、全国各地の先生方との交流を深めていく。また、海外に向けても積極的に発信・交流を行い、小学校教師教育の国際的拠点校の役割を果たす。 (3) 全職員の積極的な参加と協力によって、学校運営を進めていく。 		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> (1) カリキュラム・オーバーロードを解決するためのカリキュラム開発を進める。 (2) コロナ禍前の学校行事の見直しを図りつつ、学習活動を充実させていく。（海外との交流、インクルーシブ教育の推進を含む。） (3) STEM+（ステム・プラス）を中心に総合活動の内容や方法を見直し、教科外活動の新たな可能性を探る。また、一人一台端末の有効的な活用方法を探りながら、学習環境の整備に努める。 (4) 他附属との連携も含め、新たな附属小学校のあり方を探る。（将来構想を含む。） (5) 職員の業務内容を整理し、勤務状況の改善を図るとともに、法令遵守を徹底する。 (6) 児童の安全環境の整備を進める。 		
④ 前年度（令和4年度）の成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> (1) 校内研究では、「『美意識』を育てる」をテーマにした4年次の研究を進めてきた。関連して、文部科学省指定のカリキュラム開発に取り組んだ。6月の研究発表会はオンラインで、2月の初等教育研修会は対面＋オンラインで行うことができたが、今後の開催方法や内容については検討が必要である。 (2) 宿泊行事や集会活動など、コロナ禍前の姿に近づきつつある。試行錯誤を繰り返したことによって、内容や日程を見直すことができた。今後の計画に生かしたい。 (3) 児童一人に一台ずつPCが配られ、Wi-Fi環境などの整備も進められてきたが、指導する教員によって、授業における活用方法や頻度に差が生じている。学年に応じたITリテラシーを高めることも求められている。 (4) 北欧での授業研究会を再開することができた。協定の延長や新規の交流についても要望が届いているので、今後さらに海外との交流を推し進めていきたい。 (5) 著作権など法令遵守に関する勉強会を開いてきたが、まだ不十分な点が見られる。今後、研究倫理も含め、さらに研修を深め、各職員が職責を果たせるようにしなければならない。 		

3 重点目標達成についての総括的評価

令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が第5類に位置付けられたことで、学校の教育活動がほぼコロナ禍前の状態に戻すことができた。具体的には、6学年全員による富浦合宿、保護者の参観を伴った運動会、全校児童が一堂に会しての卒業生を送る子ども会など、人数制限を伴わない学校行事の開催に代表される。

重点に挙げていた海外との交流も再開された。教育開発国際協力研究センター（CRICED）の要請により本校教員のインドネシア派遣、デンマーク国立数学教育開発センターおよび Collaborative Lesson Research-UK の招聘によりデンマーク、イギリスへの教員派遣を行った。またコロナ禍によって中断していた韓国からの教育視察団の受け入れも1月に再開した。さらに、4学年によるハワイ研修の再開、そして新たに筑波大学附属大塚特別支援学校や、桐が丘特別支援学校との交流も実施され、児童の学習活動も充実をみた。

研究活動では、4年間にわたる学校研究（テーマ「『美意識』を育てる」）の最終年度として、6月に研究発表会を開催した。同時に、カリキュラム・オーバーロードを解決などを目的としたカリキュラム開発を行った。これは、4年間にわたる文部科学省の研究開発学校の指定を受けての事業であり、1月に文部科学省において最終年次の発表を行った。

STEM+ の考えを取り入れた総合活動の内容や方法を模索した学習活動については、各学級で取り組みが進められている。その成果は、引き続き研究発表会や「教育研究」誌を通して、発信しているところである。

職員の業務内容の整理をするために、校務分掌における年間運営計画作成時における業務内容の精選、整理、役割分担の合理化を試み、業務改善を図っているところである。

本校の将来構想については、校長が全職員に対して個別に面談を行って意見を集約し、小学校としてのプランを作成し、今後将来構想委員会にて検討を継続していく。児童の安全環境の整備については、不審者対応マニュアルの見直し、改善を図るとともに、防犯設備の点検を進めている。

4 令和6年度の学校課題

令和5年度における教育課程等の自己点検の結果、課題があった。令和2～5年度は、文部科学省研究開発学校の指定を受けていたので、標準授業時数によらない教育活動を行っていたが、令和6年度は、文部科学省研究開発学校の名目指定を受け、令和7年度からの標準授業時数確保に備える。

一部の職員に、法令遵守が徹底できていない事案が認められた。いじめ発生の管理職への報告が遅れたり、管理職決裁を経ない教育活動が行われたりするなどである。今年度は、法令遵守について一層の意識向上が課題である。

上記の教育課程の課題及び法令遵守の課題は、これまで長年にわたって引き継がれてきた踏襲文化とも無関係ではないと考えられ、職員の意識改革も課題であると考えられる。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

令和6年度は、文部科学省研究開発学校の名目指定を受け、令和7年度から標準授業時数による運用を目指し、各学年における時間割の見直し、修正、及び各教科における年間指導計画の整備を行う。

法令遵守の徹底に向けて、全職員に対するヒアリングを行い、意識の実態調査を行うとともに、必要に応じて研修会を開催するなどして、具体的な事例について取り上げながら職員の法令遵守に対する意識向上を図る。

また、長年にわたって引き継がれてきた踏襲文化の改善を図るべく研修会も開催し、意識改革を進める。いずれも継続的な取り組みを弛みなく行うことが肝要であると考えられる。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- 『研究紀要』第79集（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 『教育研究』令和5年5月号～令和6年4月号（編集：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 2023年度『初等教育研修会』要項（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
- 「『美意識』を育てる～共に幸せに生きるための授業とカリキュラム～」（著：筑波大学附属小学校）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和5年度

学校名

筑波大学附属小学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	2階とは違い、3階の教室の冷房がなかなか効かないことに問題意識をもった子どもたちが、その原因を探り、問題を解決するための方法についてICT機器を使うなどして調べ、実際に解決に向けて動き出している。これは6年生の例だが、例えば、総合活動においては各学級で児童の興味・関心を生かした主体的な学習を進めることができている。各教科の学習においても、学習材との出会わせかたの工夫、発問や指示の工夫、学習活動の工夫を施し、児童が主体的に学べるような指導法を継続的に行うことができた。
1-2-2	児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況	令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類相当となり、通常の学校生活が送れるようになった。このことをきっかけに体育の授業はもとより、運動会、登山を伴う校外学習や海での遠泳、雪の生活などを、コロナ以前の状況に戻すことができた。しかし、例えば運動会では、それまでの運動不足によるケガが危惧されたために、一部プログラムを変更するなど、児童の体力状況を把握した取り組みを行った。学力については、形成的評価を適切に行い、個に応じた指導を施し、学力差が広がらないよう、指導することができている。また総括的な学力の状況を把握するために、6年の全国学力・学習状況調査や、各学年でも学力テストなどを行っている。
3-1-2	問題行動への対処の状況	問題行動の早期発見に努め、学級担任のみならず、学年部、専科教員、管理職と情報共有しながら対応に当たってきた。昨年度に引き続き、問題行動などについては、定期的に会議をもち、全職員で情報を共有している。またSCやSSWにも助言を仰ぎ、当該児童の保護者と連絡を取り合いながら対応してきている。しかしながら、いじめを起点とする不登校事案一つについては、早期発見、管理職への報告が遅れたために重大事態に発展し、現在も教育局の協力を仰ぎながら対応中である。
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	児童が自ら考え、自主的・自律的に行動を起こす姿が、随所に見られた。高学年のあるクラスでは、音楽科で学んだ合唱活動を起点とし、学校周辺の高齢者施設で歌声を披露したいと声があがり、プログラム作成、先方との交渉など、あいさつ、礼状、マナーなど複合的な課題をみつけ、見事に実践した例がある。また低学年のあるクラスでは、使い終わった段ボールのゆくえなどに課題をみつけ、再利用の方法を考えたり、有効利用を全校に呼び掛けるなどの活動に発展させていた。

4-1-3	法定の学校保健計画の作成・実施の状況、学校環境衛生の管理状況	<p>養護教諭（保健主事）が年度初めに綿密な運営計画をつくり、職員会議で提案している。また毎月行われる保健部会において、計画の遂行状況を確認し、児童への指導、学級担任や家庭への連絡等を行った。</p> <p>新型コロナウイルス感染症が5類に移行したが、その後も各教室のアルコール消毒配備等衛生環境を整えるとともに、全職員、全児童においては、アプリによる毎朝の検温、体調の学校への報告を継続している。</p>
6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>筑波大学附属大塚特別支援学校と本校5年生が、交流活動を行った。6月には保谷田園教場において、ジャガイモ掘り、スイカ割りなどを一緒に楽しみ、冬には附属大塚特別支援学校に赴き、未来の体育館で遊んだり、ポッチャのスポーツを楽しみ、親交を深めた。この交流は、今年度も継続する計画である。また附属桐が丘特別支援学校と本校3年生においては、本校児童が先方に赴き、劇を披露したり一緒にゲームをするなど活動を広げ、交流を深めた。</p>
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況	<p>若桐会、後援会における学校への支援活動は、その規模の大きさ、意識の高さに感謝するばかりである。若桐会のなかでもっとも大きな主催行事である若桐祭は、令和5年度においてはコロナ以前の体制に戻すことができた。学校予算、大学予算だけではカバーできない部分についても援助をいただいているところである。また、学校評議員会では、地域の方、本校OB、研究者などに参加していただき、学校の様子をお知らせするとともに、学校の教育活動についてご意見をいただいている。</p>
14-1-3	先導的教育研究	<p>文部科学省研究開発学校の指定を受け、令和2年度から4年間にわたる研究を終えた。カリキュラム・オーバーロード問題の解決に向けた研究であったが、筑波版カリキュラムの作成を行い、最終発表を終えた。また本研究を支えた理論は、並行して行われていた学校研究「(テーマ)『美意識』を育てる」で得られる知見に基づいていた。先導的教育を支えるものは、教員個々の弛まぬ努力と、ひと月に一回行われる校内研究会で公開される研究授業、そしてそのあとに続く協議会で熱心に議論される指導法や理論にかんする議論であろうと考えられる。教科の枠を超えて議論される場合は、教員の質を向上させる機能を有していると思われる。</p>
14-1-4	教員養成・教師教育	<p>教員養成に関しては、筑波大学の初等教育コース（教科教育法）への本校教員による授業を行うとともに、筑波大学生の教育実習を毎年受け入れた。また、教師教育に関しては、毎年6月に行われている学習公開・研究発表会や、2月に行われている学習公開・初等教育研修会において、全国さらに海外からの先生方をお迎えしている。また本校の研究の内容や成果などを、毎月発行されている教育雑誌「教育研究」の発行により全国に向けて発信した。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>教育開発国際協力研究センター（CRICED）の要請により本校教員のインドネシア派遣、デンマーク国立数学教育開発センターおよび Collaborative Lesson Research-UK の招聘によりデンマーク、イギリスへの教員派遣を行った。またコロナ禍によって中断していた韓国からの教育視察団の受け入れも1月に再開した。さらに、4学年の希望者30余名によるハワイ研修（日米児童交流会）では、ハワイ大学附属小学校、高等学校、私立小学校との交流を図り、本校児童が日本の文化について相手校にワークショップ形式で紹介するとともに、相手校からの歓迎のレセプションなどを通して充実した交流を図ることができた。</p>